

暫く御目にかかる機会のないことを残念に思っております。八月二十八日東寮の現状を拝見したくて、私達七名東女に参り、学長及び桃井事務局長に面会を申込みましたが、学長は休暇中、桃井氏は昼食のため不在とのこと、やむを得ず東寮に向って歩いていきましたら、何と桃井氏が現場から出てこられたので、これ幸いと現場に入れて頂きました。

お断りしておきます。私達は無断侵入でなく、桃井氏の配慮によって、取壊し現場を見ることができ、写真をとることができたのです。

寮周囲の大木はすでに伐採され、命を失って無惨に積みあげられていました。さらに無惨だったのは、寮舎で、窓枠内のガラスは引きはがされ、窓枠自体や扉も運びだされ、部屋の内壁もこわされて瓦礫の山、天井はむきだしの内側をさらけだしてまさに半死半生凄惨きわまりない光景でした。

しかし、私達は、それを悲しみ嘆くために来たものではありません。東寮崩壊は悲しむべきことですが、ここに展開された東京女子大史の重大な歴史的一面を見届けにきたのです。入る前に桃井氏に尋ねましたら、「仕事ではあるが、複雑な心境です」といわれ、寮の内部の机・引出しやパーラーの一部を保存すべく努力すると確約されました。私は、「ここに到っても東寮が保存できなかったことを納得していない」ということを申し上げた上で、パーラーの暖炉、欄間、作りつけの椅子等は是非保存をお願いしたいと申し上げました。この間の応答で桃井氏が古びた寮を冷然と見捨てるのではなく、その価値を認めて保存の意思をお持ちと伺い、その労を多としたいと思います。しかし、全面保存と一部保存では意味が全く違うことはたしかです。例えば、唐招提寺を壊し、鴟尾と柱の一部と図面と模型を残しても保存とはいえません。しかし極めて限定的な意味で一部でも保存できれば歴史の証言者として役には立つでしょう。

寮の内部、及び外側を歩き、すでに破壊されつつある屋根を胸痛む思いで見上げ、さまざまの感想を持つことができました。

聞くところによると翌日轟音とともに東寮は破壊されたそうですが、してみれば二十八日、まさに臨終寸前の姿をこの眼で確かめたわけで、東女レーモンド会に入つて、この機会を得たことを生涯の思い出としたいと存しております。出来れば、原田様及び学長と並んでこの光景を眺め、御感想を承りたかったと思います。囲みを出て、やや遠くから眺めた東寮の瓦屋根、白い壁は明日までの命とは知らぬげに静かに夏の陽を浴びていました。

さて、東寮の崩壊ですべてが終わったわけではありません。残されたいくつかの問題とお願いがあります。

東寮に連る塔を残していただき、アーカイブとして活用していただけない

かということですが。新校舎建築の範囲からは外れているので、それは可能ではないでしょうか。保存が可能かどうか複数の専門家に調査していただき、その結果を公表していただければと存じます。もし、塔が残るなら、拾いだした部屋の部品で組み立てるとか、パーラーの復原も可能かと思われれます。各大学がそうした大学の歴史ミュージアムを計画していますし、私も知人の文化財保護の専門家に東寮を東女博物館にすべきと言われたことがあります。もし、保存が可能なら、同窓会か或いは有志で保存のための新しい募金もいかが？

体育館は、是非保存して下さい。東女らしい歴史を持つ建物です。この日学生さんがここを使用しておられるのを二階から拝見しました。まだ使えるのではないのでしょうか。新校舎の中の体育室は別の用途に使ったら？保存には、費用がかかるかもしれませんが、保存は歴史を持つ存在に与えられた義務であり、痛みです。高松塚がある故に保存は大変ですが、高松塚など及ぶべくもない短い歴史のアメリカと日本に違いはここにあります。この建物は部分保存には適しません。全体を保存し、有形文化財への指定を。

ご存じの通りレーモンド展が九月十五日から、神奈川近美・鎌倉で始まります。海外メンバーを含めて関係者の御希望があるかと思われれますので、その際は学内訪問を受入れて下さい。生きているレーモンド建築を世界の方々にアピールして下さいますように。

なお、私は、藤原房子代表不在の間の代表代行ではありません。しかし、会の発起人の一人として、東寮が止めを刺される前日稀有な機会を得ましたので、御挨拶をお願いを申しあげます次第です。  
お返事をお待ち申しあげます。

東女レーモンドの会

永井路子

理事長

原田明夫様

この書簡、湊学長にお見せになるかどうかは、原田様の御判断におまかせいたします。